

故郷をめぐる抗争

『日本浪漫派』における亀井勝一郎と山形高等学校『校友会雑誌』――

森岡卓司

(文化システム専攻 アジア文化領域担当)

1 はじめに

一九三〇～四〇年代日本におけるナショナリズムの高揚、とりわけ文芸思潮における〈日本回帰〉以降のロマン主義的な動向の主軸を担ったとみなされる雑誌『日本浪漫派』(一九三五・三～一九三八・八、なお、以降の論述において、雑誌そのものは『日本浪漫派』、同人グループについては「日本浪漫派」とそれぞれ表記する)については、その研究が現在に至るまで盛んに続けられている。そこに大きな評価の振幅を伴いはするが、しかし、僅か三年ほどの期間、同人雑誌の形態をとって発行されたに過ぎない『日本浪漫派』を、日本近代文学史上に看過し得ぬ問題を提示する文学運動として認める点においては、既に共通の理解があると云ってよい。

ドイツロマン派からの影響、プロレタリア運動からの断絶と連続、昭和抒情詩史における位置、同時代の政治権力との関係など、「日本浪漫派」に関する論点は多岐にわたるが、その中心には、雑誌が帯びたナショナリズムの内実の解明という課題がある。戦後、「日本浪漫派」についての学術的な再検討の端緒を開いた藤田省三は、「官僚機構の命令政治に反対して非政治的な自主的共同体をつくらうとする運動」としての「農本主義」と『時務』すなわち政治を拒否してイロニーの世界で「孤高の反抗」を行わんとする「日本浪漫主義」との対応を主張した¹。こ

の藤田の問題提起を引き継いだ橋川文三²は、「現実の「革命運動」につねに随伴しながら、その挫折の内面的必然性を非政治的形象に媒介・移行させることによって、同じく過激なある種の反帝国主義に結晶したものと」して「日本浪漫派」の本質を定義した。

「日本浪漫派」について、既存の政治運動とは乖離した主情的なものであることに注目する橋川の議論は、現在でも基本的な評価軸として用いられ続けている重要なものだが、その議論の中で橋川は「日本浪漫派」の中心となった保田與重郎のナショナリズムについて、小林秀雄によって示された当時の都市生活者における故郷喪失の感情(「故郷を失った文学」³)と対比しつつ、特徴を検討している。橋川によれば、「保田の歴史ないし伝統は彼が生まれた大和という特殊な土地柄に育まれた「感性的郷土に基礎を置いて」いる。「感性的郷土」とは、「伝統」に支えられた固有の場所でありながら、現実のその場所とは異なる、という性質を意味しており、その「郷土」は、「大和」でありながら「大和」ではないという、イロニーとしての相貌を帯びることになる。そして、この「感性的郷土」への信頼は、「自分には……そもそも故郷という意味がわからぬ」という小林とは「明かに異なっている」。この対比によって、当時の都市部に生活する青年の日本主義、即ち決断主義的な反近代、西洋の態度とは異なる、保田の「没主体」的な「国学的主情主義」、即ち「ロマン化されたイロニー」としてのナショナリズムの様相が描き出される。

しかしもちろん、橋川の意図は、保田と小林との差異を強調することにはなかった。そうではなく、「感性的郷土」への依存と都市生活における「故郷喪失」という、それぞれのあり方で「現実の郷土」との断絶を抱えた「かれらが」、共に、「インテリ層の戦争への傾斜を促進する上で、もつとも影響多かつたこと」を示すことが、ここでは目指されていた。「これらに共通する」「一種の反政治的思想」こそが、「もつとも政治的に有効な作用を及ぼした」のであり、その根底には「現実に対する独特なオプスキュランチズム」が存在した、というのが橋川の議論の骨子である。

保田のいわゆる（ヒロニーとしての日本）に看取される、こうした「感性的郷土」と「反政治的」ナシヨナリズムとの関わりは、大久保典夫⁴によって再度問題化された。「故郷にまつわる土着のくらしと不可分離」な思想として保田の日本主義を理解しようとする大久保は、橋川の「感性的郷土」という分析を批判した。しかし、大久保の意図も、「土着」性を強調することによって、保田を当時の日本の政治体制に浸透していた近代ナシヨナリズムから分離しようとするところにあり、既存の政治運動との乖離を強調する橋川と全面的に対立しているわけではない。

このように、藤田、橋川の提起を受けて、一九六〇年代に活況を呈した「日本浪漫派」研究は、二〇〇〇年代を前にケヴィン・マイケル・ドーク『日本浪漫派とナシヨナリズム』⁵が出版されたことなどを契機に再度盛り上がりを見せた。とりわけ保田のテクストに示されるヒロニーの内実について、『日本浪漫派』同人、さらにそれ以外の詩人・批評家との比較において様々に検討が深められ、橋川の議論にも、いくつかの修正が提案されることになった。

ドークは、橋川の「日本浪漫派」理解が、他の同人たちの活動を軽視して専ら保田のみに注目し、とりわけその出自を巡る伝記的な解釈に過度な比重を置いていることを指摘した。同じく保田の「郷土」を巡る神

話を批判する渡辺和靖⁶も、初期保田の思想形成を同時代の思想史的動向の中に批判的に再定位しようと試みた。

「日本浪漫派」の提示した問題を保田ひとりの思想に収斂させることは確かに無理があり、その結論として「大和」の再神話化に荷担することにもさしたる意義はないだろう。ただし、後にも触れるように、『日本浪漫派』誌上において、「郷土」を巡る言説が大きなテーマのひとつとしてとりあげられていたこともまた、否み難い事実である。本稿は、それらの言説を単なる意匠として切り捨てるのではなく、むしろナシヨナリズムをはじめとした同時代の思想的潮流とも深く関わった複数の「郷土」表象言説が葛藤する場として、『日本浪漫派』の全体を捉え直すことを試みたい。それはもちろん、保田の伝記的な事実や彼の「郷土」言説にのみ還元されるものとして『日本浪漫派』を捉えることを意味しない。橋川の評価に修正を提案してきたこれまでの論者においてすら注目されてこなかったことだが、この雑誌は、日本の文化的な伝統の淵源に夢見られた幻想の「大和」ではない、別の「郷土」の表象を積極的にに行ったと思える一時期を持っていたのである。

2 『日本浪漫派』の中の「山形高校」

中谷孝雄『同人 青空・日本浪漫派』（講談社 一九七〇・四）によれば、中谷の妻平林英子が雑誌『現実』の同人会議に出席し、同雑誌の同人であった亀井勝一郎と保田與重郎とを中谷に紹介したことをきっかけに、『日本浪漫派』刊行の相談ははじまった。

太宰治、檀一雄らがいた『青い花』との合流を経て、同人の拡大路線に転じ、終刊時までの同人五十六名、寄稿・関係者まで含めると六十八名をも数える⁷と言われる『日本浪漫派』グループは、当初は少人数による運営を志向して出発していた。

新しい雑誌の計画は、私達の間でかなり速かに進められたやうだ。

やがて亀井もそれに加はり、三人で同人を選ぶことになった。しかしその時の話では、同人はなるべく少人数にしようといふことで、各自がひとりづつ友人を連れてくることにした。私は「世紀」の同人のなかで最年少の緒方隆士の将来を大いに期待してゐたので、彼を誘ふことにした。そして保田は「コギト」の同人で評論家の中島栄次郎を、また亀井は彼の山形高校時代からの友人で詩人の神保光太郎を連れてくることになった。(中谷孝雄『同人 青空・日本浪漫派』)

この中谷の回想について、第一に注目されるのは、『日本浪漫派』の出版に際して最も大きな母体となった雑誌として、通説の『コギト』のみを中谷が重視していたわけではない、ということである。

雑誌『コギト』は、保田が旧制大阪高等学校時代の級友を軸に創刊した同人雑誌で、『日本浪漫派』とも並行して刊行が続けられた。『日本浪漫派』を一躍著名にした「『日本浪漫派』広告」(『コギト』一九三四・一一)が同誌に掲載されたこと、また、保田をはじめとして多数の有力寄稿者の重なりがあったことなどから、「そもそも日本浪漫派の母体となったのは、『コギト』であることに異論を挟む者はあるまい」⁸とまで言う同人の回想もある。しかし、創刊時の中心人物であった中谷によれば、保田亀井の両名を中谷に結んだ雑誌として意識されているのはあくまで『現実』であり、『コギト』は『世紀』と同格のものに過ぎなかったことになる。

雑誌『現実』には、亀井、保田の他、本庄陸男、田辺耕一郎、神保光太郎らが参加していたが、二年間の投獄の果ての転向を経験した亀井だけでなく、田辺耕一郎にはナツプの雑誌『戦旗』の編集に関わった経験

があり、また神保光太郎も築地小劇場を介して社会主義運動に近づいた一時期があった。保田が高等学校在学時代にソビエトをモチーフにした短歌を書いていたことは、磯田光一の紹介。以降つとに知られている。しかしもちろん、プロレタリア文学運動の弾圧と非法化を経て、『現実』創刊の一九三三年までには彼らのマルクス主義体験はそれぞれの終わりを迎えていた。

『現実』の同人について、亀井は、「単に文学好きだけの集りではなく、「程度の差こそあれすべて左翼に関心を持ち、動揺不安の気持ちを抱いてゐた」者たちが、「左翼の退潮と戦争への第一歩と、あはせて政界の墮落やテロリズムの発生等によつてかもし出された時代の危機感、その不安から何か寄りどころを求めて集まつた」ものだったと回想している¹⁰。すなわち亀井は、特定の文学的エコーの抛り所としてではなく、イデオロギーからの離脱を経験した青年たちが今後の方向性を模索する、より雑多な場として『現実』という雑誌を捉えていることになる。中谷の回想が『コギト』を特別視しないのも、彼がそこに参加していなかったからではなく、そうした雑多な寄り合いの先に『日本浪漫派』という雑誌の出版があったという彼の認識を示唆していると考えられる。しかし、本稿において中谷の回想からとりだしておきたいより重要な問題は、そうした背景の中に、「山形高校」の名前が持ち出されていることである。

政治的な指針を見失った青年文学者たちが、しかし経済的にも社会的にも恵まれた背景を持つていたことには早くから言及があった。板垣直子は、そのことを、「彼等自身の考へる新時代の建設と到来を助けることの確信」が「彼等の大部分が経済的に恵まれた生立ちと生活をもつてゐることに助けられてゐる」¹¹と指摘しており、「日本浪漫派」が帯びた「専ら青春の歌の高き調べ以外を拒み。昨日の習俗を案ぜず、明日の真諦をめざして滞らぬ」(『日本浪漫派』広告) 前掲) という高踏

的な詩精神が、先述の政治的運動からの退避と同時に、当時の高等教育によって形作られた知識的基盤の上に醸成されたと見ることは、半ば通説ともなっている。

だとすれば、ここで出身旧制高校の名前が持ち出されることには、ある程度の必然性もあるとは考えられよう。しかし、ここで「山形高校時代からの友人」と言われた神保は、先述したように『現実』の同人でもあり、また『コギト』の有力な寄稿者でもあったのだ。

もちろん、これは単なる呼び方の違いに過ぎないとも言える。しかし、ここで問題にしたいのは、亀井と神保とを「山形高校時代からの友人」という言葉で中谷が振り返りたくなるような事情が、『日本浪漫派』誌上にあつたのではないか、ということだ。

この回想記の別の箇所において中谷は、「保田君の饒舌なのに比べ、亀井君は余りしやべらない」という対比的な人物観察の一端として、亀井と神保とが東北方言を用いたことにも触れている¹²。山形市生まれの神保はともかく、北海道函館に生まれ旧制山形高校卒業後は東京に進んだ亀井がどれほど東北方言話者であつたか疑わしいが、中谷の認識においては、亀井と神保とは東北¹³山形のイメージにおいて強く印象づけられていたことがここにも傍証される。

『日本浪漫派』第三巻第一号(一九三七・一)の目次を参看しよう。

萬葉を継ぐもの 真壁仁／方法論(四) 芳賀檀／かがやく藤壺のころの歌 保田與重郎／故郷落想 阪本越郎／「魔園」の魅力 澤西健／亜寒帯の詩人 郡山弘史／保田與重郎 中河与一／この人 伊藤佐喜雄／大和について 高橋幸雄／友情 神保光太郎／感想 伊東静雄／東洋の希臘人 亀井勝一郎／保田與重郎 芳賀檀／夜の歌 中谷孝雄／夜の歌 保田與重郎／悪夢 檀一雄／白鳥は死ぬか も知れぬ 阪本越郎／輪燈(四) 斎藤信／奴婢 北村謙次郎／花

宴 伊藤佐喜雄

この号が発行される直前には、保田の『英雄と詩人』(人文書院 一九三六・一一)『日本の橋』(芝書店 一九三六・一一)の刊行があり、保田に関する評が多数目につく。それらは一様に「この国の真詩に確乎と地盤を与える」(伊東静雄「感想」)、「我々の芸術の伝統」「血統」(中河与一「保田與重郎」)など、保田の日本主義者としての側面を絶賛しており、一躍時の人となって同人間にも強い影響力を持った当時の保田の立場をそこからうかがい知ることができのだが、その中であつて、高橋幸雄「大和について」は、保田の故郷大和に対する態度を「魔窟的憧憬」と指摘している。これは、先に見たイロニーとしての「郷土」意識¹⁴日本主義という保田に関する理解が、刊行当時の同人間にも既に共有されていたことを示す。

しかし、そうした雑誌の巻頭を飾っているのは、「村夫子然たるモンペ姿」の地方歌人、「ぼくらの父祖」であり「野良に於ける親しい仲間」でもある結城哀草果についての真壁仁の論文だった。言うまでもなく、哀草果と真壁とはともに、山形に育ち、山形に住み続けた文学者である。彼ら二人以外にも、山形ゆかりの人物が同号の誌面に登場している。「故郷落想」を書いた阪本越郎も、山形高校で亀井の同級生として学んだドイツ文学研究者である。阪本は福井県の生まれで、東京にある芝中学校の出身だったが、このエッセイのなかで彼が扱っている「故郷」とは、実は山形のことであつた。

以上のような誌面の状況をまとめるならば、この『日本浪漫派』第三巻第一号において、保田への賞賛が中心的な位置を占める中に、あたたかもそうした流れをせき止め介入するかのようになり、山形という土地に関係のある記事が挿入されている、ということになる。後述するように、ここには、この号を含む一定の期間、雑誌の編集を取り仕切った亀井の

明確な意図があると考えられる。先に見た、中谷の「山形高校時代からの友人」という印象も、保田が主導した、大和という「感性的郷土」に支えられた日本主義と、亀井が主導した、山形という「郷土」表象との間に存在した、このような緊張関係の記憶によってこそもたらされていたのではないだろうか。

3 『日本浪漫派』同人の山形高等学校時代

『日本浪漫派』誌上における山形表象言説を検討する前提として、それらを執筆した同人たちの関係について、時を遡って確認しておきたい。

私が山形高校に入ったとき、上級に阿部六郎がゐて、学校の雑誌に詩を発表してゐた。同級には阪本越郎がをり、私たちが二年になったとき、神保光太郎が入学してきた。阪本はこのころから詩をつくり、神保光太郎はまづ弁論部に入つて、山形弁で「お、太陽よ」といつたふうな演説をしてゐた。阪本等と同人雑誌を出したのもこの頃である。「樞音」といふ雑誌で、たしか二号でつぶれたが、私は生れてはじめて小説を一篇と戯曲を一篇書いたわけで、これが私のものの書きはじめである。(亀井勝一郎『現代史のなかのひとり』¹³⁾)

山形高校出身の亀井、神保、阪本の三人が、後に京都帝国大学教授となった高山岩男らとともに同人誌『樞音』を出していたことは、当人たちの回想などによって知られているが、雑誌は散逸し、その内容を現在確かめることはできない。ただ、彼らが共通して発行に関わった山形高等学校『校友会雑誌』誌面に、当時の様子を窺い知ることができる。

創立勅令が一九二〇年四月一九日に公布され、同年十月五日に開校式を迎えた旧制山形高等学校は、一九一八年までに開校された一高から八

高までのいわゆるナンバースクール、そして一九一九年に開校された新潟、松本、山口、松山の各高等学校に次ぐものとして、水戸、佐賀と同年に設置された高等学校であった。すなわち、当時の東北地方には、第二高等学校の他には山形高校しか存在せず、提灯行列で招致を祝ったという地域の人々はもとより在学生たちもそれを大いに誇りにしていた。

開校に伴い、山形高等学校校友会は『校友会雑誌』第一号を一九二一年三月に発行した。その「編集後記」には「自分達はわが校友会雑誌をして少くも高等学校のそれとしてあまり恥しくないものであらしめたい」「然し紙数に制限もあり、雑誌の品位というふものもあるから、充分自信のある、精選した物を出していたゞきたい。何でものせる訳には行かないから。それから何等の意味も背景もない、安価な、ふやけ切つた肉感描写などは、この雑誌では排斥することにしたと思つてゐる」と、いささか勢い込んだ方針が披露され、また第七号(一九二三・一二)の「編集後記」には、「東北西方に咲く唯一の文化、而もその存続が永久であるべき此の山形校友会雑誌」と、東北地方における文化的な存在感への自負が語られている。

亀井と阪本が入学したのは一九二三年、神保が入学したのは一九二四年であったが、『校友会雑誌』巻末の部報によれば、亀井は会誌部¹⁴⁾、阪本と神保は弁論部に所属した。亀井は弁論部主催の例会の常連弁士であった¹⁵⁾らしく、三名はこれらの部活動においても濃厚な交流を持ったようだ。

そうした活動の成果は、『校友会雑誌』上にも示された。第七号(一九二三・一二)には阪本が「若人の秋」と題した短歌群を、第八号(一九二四・六)には亀井が戯曲「独唱」を、第一〇号(一九二五・六)には阪本が「さみしき童」と題した詩群四編を、亀井が戯曲「診察」を、第一一号(一九二五・一一)には亀井が戯曲「進行の一例」を、阪本は「春かなしく」と題した短歌群及び小説「耳」を、そして第一三号(一九二

七・一)には神保が「叛逆の血」と題した短歌群をそれぞれ発表している。しかし、それらの作品の水準は、各々の習作の域を出ているとは言い難い。一九二三年全寮寮歌として現在も歌い継がれる「ああ乾坤」の作詞者でもある阪本の作品は青年らしい感傷癖を隠そうとはせず、亀井の戯曲はいずれも過度に観念的な科白劇とでも言うべきもの¹⁶になっている。わずかに、後の政治運動への接近を思わせるような革命運動への憧れとヒロイズムとを看取しうる神保の短歌¹⁷に留意すれば足りようか。

ただし、『校友会雑誌』の編集を担当した亀井が、この雑誌の性格を変更しようとする意図を表明していることには注目するべきだろう。第一〇号の「編集後記」において「この雑誌にのせるには何かしら、非常に技巧的にすぐれた大作でなければならぬやうに思ふ方もありますが、今まではともかく、これからはむしろ通俗的なものが載つてもいい」、「そう深刻に考へて、年中深刻になつて、そこからのみ良い作品が生れてくるわけでもなく、況や芸術至上主義などは一切御免蒙つて、万事直接の人生から端的に率直に何ものが生れてくるなら」と、従来¹⁸の同誌に見られた術学趣味や誇張癖を批判した亀井は、第一一号「編集後記」においてはさらに踏み込んで次のように述べている。

雑誌は創刊以来既に拾号、第三者の立場からは是を冷酷に批判すれば、こゝに見らるゝもの過去の自然主義的乃至淡いローマンティックな作品の反映に外ならぬ。つまり文壇がある時代ある型に陶醉しきつてしまふ如く、こゝにも亦かやうな伝統的本流を見ると言ふのである。従つて一の飛躍なく一の創造なく、然かも読者僅少。若し微温的な純文芸雑誌に終らんとするならば雑誌部はあつてもなくても差支へないであろう。然し是は稍々悲観的な立場かもしれぬ。所が委員の側から言へば否一般の立場として考へても、決して絶望はしてゐない。かゝる傾向を打破して真の科学と新鮮な芸術を開展せし

むることは特に大きな希望であり同時に実行の過程であらねばならぬ。(亀井勝一郎「編集後記」)

能動的な意志を超越した自然との接触において生じる感傷的な悲哀に主眼を置く自然主義的な態度、いまここにある現実を否定して想像的な世界に逃避しようとするロマン主義的な態度の双方への「陶醉」を批判し、「真の科学と新鮮な芸術」の「実行の過程」を求める若き亀井の主張には、後の『日本浪漫派』創刊期における彼の思想への確かな連続を認めることができる。

一九三四年三月、神保に宛てた手紙の中で、亀井は保田の評論について次のように述べている。

保田君の評論に心ひかれるのもあの人が革命前期のロマンティックの精神を最も率直にうつし出してゐるからです、あそこにある高揚して行く精神は、もつとも下降のどん底にあるものをさへ包括して行くほど現実的な精神だと思つてゐます、プロ文学の術語をひとつも使はずに、あれほど真のプロ文学に近い精神をあらはしてゐるものはないようです(神保光太郎宛亀井勝一郎書簡 一九三四・三・二九)

この亀井の評価は、若干意味の取りづらい、文脈依存度の高いものになっている。だが、これより以前の部分に「空々しくもプロ文学の機械論をふりまわしてゐるのを見ると、真実腹が立つて仕方がありません」「あけてもくれても文学文学とさわいでゐるプロ文学者ほど今日あはれなものはない」という、プロレタリア文学者たちの理論的な教条主義に対する非難が置かれていることを併せ考えるならば、ここで「現実的な精神」と呼ばれるものの中に、先の「編集後記」にも見られた、感傷や

逃避を廃した「実行」への指向性が息づいていることを確認できよう。

亀井にとつて、保田への接近、そして「日本浪漫派」の結成は、現実からのロマン主義的な遊離を意味してはいない。その全く逆に、プロレタリア文学運動理論の空疎な教条性に対する批判においてこそ、亀井は保田へと接近し、神保を「日本浪漫派」へと誘ったのであった。そうした亀井の志向に、山形高等学校時代の活動からの連続性が存在することはいま確認したとおりだが、まさしく同じその志向性によって、保田との明確な対立を意図した後期『日本浪漫派』誌上における山形表象は作り上げられていくことになる。

4 後期『日本浪漫派』誌上における山形表象というプロジェクト

「日本浪漫派」との関わりについて言及することに対して後年極めて消極的であったこともあり、真壁仁がどのようにしてこの雑誌に参加したのか、その経緯は現在に至っても必ずしも明確にされているわけではない。しかし、山形市立第三小学校時代からの友人であり、共に『至上律』（第一次）の同人でもあった神保が真壁を勧誘したと考えることが自然であろう。真壁の年譜には、一九三二年八月に「神保光太郎から新しい雑誌に加わるよう誘いをうける。しかし、同人費の負担を考えて断わりの返事を書く」との記述¹⁸もあり、神保は、自らの参加する雑誌の同人に真壁を加えるという構想を、継続的に持ち続けていたであろうとも推測される。

しかしその一方で、山形に題材をとった詩や評論を集中的に『日本浪漫派』に発表するよう真壁を誘ったのが、誌面の編集に深く関わっていた亀井であったことについては、明確にその跡をたどることができる。

『日本浪漫派』第二巻第八号（一九三六・一〇）の「後記」に、「な

ほ今月から編集の仕事が亀井がすることになった。雑誌に関する用件は一切亀井方へお願ひする。これまでともすれば渋滞勝ちであつた事務も、これからはよくゆくことになるだらうと思ふ」という中谷による告知が出て以降、一九三七年九月の脱退に至るまでの期間、亀井は誌面編集の主たる担当者となった。その間、さまざまに意図を凝らして編集にあつた¹⁹亀井は、真壁に何度も出稿の依頼を行っており、真壁もそれに応えて第二巻第九号（一九三六・一一）、第二巻第十号（一九三六・一二）、第三巻第一号（一九三七・一）、第三巻第二号（一九三七・三）、第三巻第三号（一九三七・四）、第三巻第六号（一九三七・八）に作品を発表した。これ以前にも真壁は『日本浪漫派』誌上に四度登場しているが、それらは全て詩作の投稿であり、亀井の編集担当後は、批評も寄稿するようになってきている。その一つ「萬葉を継ぐもの」が第三巻第一号（一九三七・一）の巻頭を飾ったことは既に述べた。一九三七年一月一日付の葉書では、「たとへば万葉の憶良論などいかゞですか、あるひは東北農村の実生活に関するエッセイでも結構です」と、亀井は真壁に宛ててテーマに関する直接的な示唆まで与えており、また実際に真壁はその示唆を受け容れて第三巻第二号に評論「山上憶良」及び山形の尾花沢地区の農民を題材にした詩「雲と馬」を掲載した。これらの状況から見ると、亀井の編集戦略上、重要な役割のひとつを担っていたのは真壁だったと言つても過言ではない。

亀井が真壁に何を期待したのかは、一九三六年七月三日付の書簡に雄弁に述べられている。

僕は、現在の日本ロマン派が必ずしも満足すべき状態にあるとは思つてゐません。気品と繊細な審美眼とは発達してゐます。しかし土まみれになつたやうな思索と、地上を這ひづりまはつて苦しんでゐるやうな根柢よきは欠けてゐると思ひます。それをみたまは、

あなたや神保や僕でなければならぬと信じます。同人の間でも、緑川とか渡辺寛とか中谷とか工場に住み農村に住んだことのある人は、皆さういふ氣質をもつてゐますし、あなたの詩を支持するのもこの人達です。僕ら東北の人間は、繊細な人工において欠けてゐます。が、不逞の思索力と粘着力を授つてゐると思ひますので、その点に最大の誇りと自信とをもつて進んで行きたいものです。(眞壁仁宛亀井勝一郎書簡 一九三六・七・三)

これは、多数の餓死者を出した一九三四年の冷害を極点とする東北大飢饉の記憶を引きずる東北の農村を舞台にした眞壁の詩『浸種の朝』(『日本浪漫派』第二巻第五号 一九三六・六)を賞賛し、「あなたの農村の随筆もほしい」という「希望」を述べた後に続く部分である。「土まみれになつたやうな思索と、地上を這ひづりまはつて苦しんでゐるやうな根づよさ」を加えることこそが、『日本浪漫派』に山形の表象を呼び込んだ亀井の意図であつた。

ではなぜ、「気品と繊細な審美眼」に拮抗し得るさうした「思索」や「根づよさ」を、山形を表象するテキストによつて誌面に加えられる、と亀井は考えたのか。

大久保典夫は、「保田と亀井との違い」について、「いかに生くべきか」を「文学」以前の問題」として無視する保田の「一種高踏的な文学主義(リテラリズム)」に対して、「亀井はプロレタリア文学のリアリズムの呪縛から逃れられずにのたうち廻つていた」²⁰とした。ただし、この時期の亀井が、既存のプロレタリア文学者たちへの強い批判意識を持つていたことは先に見たとおりであり、亀井の「リアリズム」には単なる素材重視の意識以上のものがあることには注意が必要だろう。亀井は、地方を題材にした平田小六「囚はれた大地」を論じて、次のように述べていた。

しかし、この作品が更に大きな興味をよぶのは、一地方部落の全貌が極めて客観的に描かれてゐるためのみではない。作者は一種の風俗史を横に織りながら、同時にそれを客観視できない能動的心理を、縦から織りまぜて行つてゐる。そこがこの作品の重要なところである。(亀井勝一郎「地方主義文学と作家の意欲」『新潮』一九三四・一一)

亀井にとつて、地方を舞台にする作品の最も重要な点は、素材としての地方の「客観的」全貌よりも、それを「客観視できない能動的心理」の側にある(したがつて、山形を描くのは、他の地方に生まれ、育つた文学者ではなく、「あなたや神保や僕でなければならぬ」)。「校友会雑誌」の「編集後記」に表明していた「実行」への強い関心と明らかに連動するこの「能動的心理」への要求こそが、この時期の亀井が拘泥した「リアリズム」の中心に見出されなければならない。そして、この「能動的心理」において、亀井は保田に対抗しようとしていた。

その意図は、「我々の友情はつねに憎悪をふくんでゐた」と書き出される亀井の「東洋の希臘人」(『日本浪漫派』第三巻第一号 一九三七・一)に、明確に表現された。「日本最古の都」に「生を享け」た保田の批評を、「すでに滅んだ王朝、芸文の最も美事に花さいた日への思慕」を語るものとした上で、亀井は、自身が「立派な寺院も絵画も彫刻もおよそ美の血統と名づくべく何ものもない北方の荒野」に生まれたことによつて、「単に見解や理論の相違ではなく、後天的な経験の差異でもな」い二人の対立が形作られるのだと述べる。

日本で一等シベリアに近い僕の故郷は、あらゆる伝統の美を蹂躪し、侵略してゆく野性の故郷かもしれない。嘗て保田與重郎に僕は云つた。「君は東洋の希臘人、僕は東洋のイスラエル人。」と。こ、

には、僕の伝統を自覚した一つの決意があつたのだ。それを表現する明確な言葉を知らない。が、何か熱い血のやうに湧いてくる感情は、「人間はシベリアでも生きて行ける」といふ一語にこもる無限の愛であつた。吹雪に耐へ、氷を踏んで、なほ力づくよく生きて行くもの、内心にほとぼしる無限の同胞愛であつた。たとへ美の伝統がなくなつても、人類はこのもの、ために立派に生きて行く、僕のひそかに確信するところである。(亀井勝一郎「東洋の希臘人」)

真壁への書簡では「土まみれになつたやうな思索と、地上を這ひづりまはつて苦しんでゐるやうな根づよさ」と呼ばれていたものは、ここでは「内心にほとぼしる無限の同胞愛」と呼び変えられているが、審美の対象である「美の伝統」から遠く切り離された「野性の故郷」において発揮される能動性がそこには通底している。保田の示す廢墟の美学の受動性を批判し得るものとして『日本浪漫派』誌上に亀井が呼び込もうとした東北Ⅱ山形の表象とは、こうした「野性の故郷」に他ならなかつた。しかし、こうした亀井のプロジェクトは、保田の反撃によって失敗に終わることになる。

『日本浪漫派』第三卷第六号(一九三七・八)における座談会「浪漫派の将来」(出席者は、亀井、保田のほか、神保、中谷、芳賀檀)において、亀井と保田とは冒頭から激しい議論を戦わせている。文化の大衆化から古典的な作品への接し方、さらには同時代の世界政治体制へと次々に話題はうつろうが、その対立は一貫して対象に対する認識の方法という点に關わつて生じている。「対象の方をまづ尊敬して」「総合といったことを急がない」という没主体的な立場を強調する保田に対して、亀井は、「僕らは、一つの思想なら思想を以て大衆といふものを見るので、あるが儘に大衆に接するといふのは、ナンセンスだらう」と、認識する側の觀念の介入、能動性を主張し続ける。「歴史は運動法則を持つ

ている」のに対し「文学史には發展法則はない、連鎖した運動法則もない」と文学作品の個別性を強調し、「文学は粒ですよ。偉大な尊い」と大見得を切つてみせる保田に対し、「大衆といふ」「組織」を「自分の觀念の中で作る」際に生じる「理想社会」という「体系」への夢に「文学の最後の目的」を認めようとする亀井の議論の、まさしく觀念的な脆弱性は明らかで、結局亀井は「とにかく評論をかきあげますから読んで下さい」とこの話題を引き取るほかなくなっている。

そして次の第三卷第七号(一九三七・九)誌上においては、保田が批評「文芸雑誌の編集方法総じて未し」を発表し、「実質」より「体系」を重視する『日本浪漫派』の編集方針を厳しく批判した。

「体系」という語を意図的に用いることで前号の座談会記事を明らかに引き継いでいる保田のこの批判が、しかし直接的にその議論における亀井の發言を狙に乗せるのではなく、『日本浪漫派』の「編集方法」をその対象に据えたことには意味がある。保田は、山形表象の導入という亀井の編集戦略とその意図に間違いなく気づいており、それを明確に否定したのである²¹。そしてこの否定が誌上に掲載されたその月に、亀井は「日本浪漫派」を脱退することになる。

5 おわりに

本稿においては、後期『日本浪漫派』誌上における東北、とりわけ山形の表象に注目し、それを、日本の古都「大和」という「感性的郷土」に支えられたロマン主義的な廢墟の美学への拮抗を目指した一連のプロジェクトとして捉えるべきことを論じてきた。そのプロジェクトを主導した亀井勝一郎の意図は、伝統美の受動的な享受とは切り離された「野性の故郷」として山形を捉え、そこに要請される能動性の意義を強調することにあつた。

山形という地域を素材とし、そこに培った人脈を活用している、という意味だけではなく、それを支える戦略的な意図の源泉を山形高等学校『校友会雑誌』にたどることができる、という意味においても、このプロジェクトは、亀井が旧制山形高校から得たものによつて成り立った、とすることができよう。

保田の主情主義的なりテラリズムを「日本浪漫派」の核心と捉え、リズムへの拘泥を残す亀井の態度を未熟かつ不徹底なものと思ふことが、従来の「日本浪漫派」研究の通説である。しかし、本稿においては、亀井がむしろ戦略的に保田に対抗しようとしていたことを重視し、「感性的郷土」と「野性の故郷」というふたつの「郷土」の葛藤の場として『日本浪漫派』を捉えようとした。

だが、「野性の故郷」が含む観念性を保田に批判されることによつて、このプロジェクトは失敗に終わる。その観念性は、座談会における亀井の発言だけではなく、結城哀草果に「日本詩歌の節操」を見、万葉の伝統の中心に位置づけ普遍化しようとする真壁の批評にもまた現れていた。皮肉にも、伝統的な美との切断を主張し人間の能動性を強調した亀井よりも、対象への絶対的な没入を主張する保田の方が、より強靱な具体性を備えていたと言わざるを得ない。

このプロジェクトに関わった者たちのその後の歩み、すなわち、『文学界』に加わりつつ日本古典研究に重点を移していく亀井、あるいは宮澤賢治研究に没頭していく真壁、そしてシンガポールに設立された昭南日本学園で植民地教育に従事することになる神保の、それぞれの「日本浪漫派」以後の営為については、また稿を改めるより他ないが、最後に、戦後の亀井が記した総括的な回想を参照したい。

僕らが十年前、「日本浪漫派」を始めてから、日本の古典に傾くやうになつたことを、僕としては感謝してゐる。それまで、おおよそ

古典を学ぼうなどといふ気はなかつたからである。直接的には昭和初頭の左翼崩壊から、自分の再生の道をそこに求めたといへるし、大にすれば西洋に対する東洋の確信といふ、民族としての自信の問題にもつながつてゐた。ところで、僕の絶えざる疑惑といふのは、自分において、古典が果して古典でありえたであらうかといふことである。ヨーロッパ古典の美を求むることくに、いはばその翻案において、古典日本を夢みたといつた方がよささうだ。

僕にとつて、古典日本はすでに異国なのである。これは明治末葉に生れて、大正に生育したものの悲しき運命といへるかもしれない。君の故郷大和を訪れても、そこにみらるるものはすでに一種の博物館である。帰るべき故郷の、一切の古典性は崩壊した、いはば廢墟なのである。この嘆きを深く語つたのは萩原朔太郎であつたと思ふ。おそらく君もまた同じ嘆きを以て、仕事を始めたに相違ない。君の著作の中核に流れるものは廢墟の悲歌である。それが日本浪漫派を称した所以であつた。

しかしこの廢墟感が、いつのまにか往時のごとき実在感に膨張したとき、ロマンチズムは傲慢な国粹主義に転じたのである。(亀井勝一郎「保田與重郎へ」『新潮』一九五〇・三)

この亀井の回想は、やや言い訳じみた点を残すとは言え、全体的には「日本浪漫派」の運動をよく総括するものとも言える。ただ、ここには一つの自己忘却がある。それは、こうした「廢墟の悲歌」への依存に甘んずることを拒否し、山形という「野性の故郷」によつてそこから脱しようとした一時期が彼にはあつた、ということである。

〔付記〕本稿は、国立台湾師範大学台湾史研究所主催「台北高等学校創校九五週年紀念國際學術檢討会」(台湾師範大学、二〇一七・四・二一～二二)

における口頭発表「山形高等学校『校友会雑誌』の出版と一九三〇年代浪漫主義文学」に加筆修正を加えたものである。研究会にお招き下さった台湾史研究所許佩賢所長をはじめ関係各位に謝意を表したい。

引用した亀井勝一郎のテキストは、『校友会雑誌』掲載のものを除き、講談社版『亀井勝一郎全集』（一九七二・二）一九七五・二二）による。

- 1 藤田省三「天皇制とファシズム」〔岩波講座現代思想 第五巻 反動の思想〕岩波書店 一九五七・七)
- 2 橋川文三『増補版 日本浪漫派批判序説』(未来社 一九六〇・二)
- 3 小林秀雄「故郷を失った文学」〔『文芸春秋』一九三三・五、初出原題「文芸時評」)
- 4 大久保典夫『転向と浪漫主義』(審美社 一九六七・九)
- 5 ケヴィン・マイケル・ドーク『日本浪漫派とナシヨナリズム』(小林宣子訳 柏書房 一九九九・四、Kevin Michael Doak, *Dreams of Difference: The Japan Romantic School and the Crisis of Modernity*, University of California Press, 1994)
- 6 渡辺和靖『保田與重郎研究』(ぺりかん社 二〇〇四・二)
- 7 ドーク『日本浪漫派とナシヨナリズム』(前掲)による。
- 8 小高根二郎「日本浪漫派とは何か」〔『解釈と鑑賞』一九七九・一)
- 9 磯田光一『比較転向論序説 ロマン主義の精神形態』(勁草書房 一九六八・一一)
- 10 亀井勝一郎『現代史のなかのひとり』(文藝春秋新社 一九五五・一〇)
- 11 板垣直子『現代の文芸評論』(第一書房 一九四二・一一)
- 12 中谷孝雄『同人 青空・日本浪漫派』(前掲)
- 13 注10前掲。
- 14 第十一号(一九二五・一一)以降「雑誌部」と改称、さらに亀井の卒業後には「学芸部」へと改組された。
- 15 『校友会雑誌』第一〇号(一九二五・六)掲載の「部報」によれば、亀井は、同年五月十四日開催の第一回例会に「美の進化」という演題で、五月三十日開催の山高二高連合演説会には「主観主義強調の芸術に就て」という演題でそれぞれ参加しており、前者については「いつもながらの卓見、深遠なる文芸上の見解感服の外なし」と評されている。
- 16 山形高等学校でドイツ語を教えた吹田順助は有島武郎の同僚として勤めた経験があり、亀井は彼の指導のもと、「ドモ又の死」の主演を演じたことがあるという(大隈秀夫「山形高等学校」週刊朝日編『青春風土記旧制高校物語 2』一九七八・一二)。
- 17 亀井が神保に抱いた信頼には、政治的なイデオロギーというよりは、そうした運動体験における内面の劇への関心があった。
「文学評論」五月号に小さな感想を書いたのですが、その中にあなたの「陳述」といふ詩の一節を引用しました。あの感情が、つまりあの敗北の心理が、今日の僕らの心理の一番奥にひそんであるものなのです。それを押しかくして粉飾してきた僕らの仲間に、僕は何かしら空しさをみい出していつも不満だったのです。(神保光太郎宛亀井勝一郎書簡 一九三四・三・二九)
- 18 佐藤治助・斎藤たさち編「年譜 一九〇七(明治四十)年～一九八四(昭和五十九)年」(東北芸術工科大学東北文化研究センター『眞壁仁研究』第一号 二〇〇〇・一二)
- 19 たとえば、第二巻第九号(一九三六・一一)の亀井による「編集後記」は、「今月はゲーテ研究を主として編集してみた」と書き出されたのち、その亀井の趣意が詳述されている。
- 20 大久保典夫「日本浪漫派の運動―出版期をめぐる―」〔『解釈と鑑賞』一九七九・一〕
- 21 こうした言説を見る限り、保田の「彼(引用者注:亀井)がどういふいきさつで浪漫派を離れたのか、さういふ事情を誰かにいつたのか、そのどちらについても私には何の記憶もない。〔中略〕亀井氏もそのひとりとして、いつか文学界の同人となつて、日本浪漫派を自然に離れたのであらう」(保田與重郎『日本浪漫派の時代』至文堂 一九六九・一二)という証言には亀井に対する配慮が働いていたと思われ、これにそのまま従うことは難しい。

Conflict in the representation of ‘homeland’: Kamei Katsuichirō in the Nippon Roman-ha and the Yamagata High School Kōyūkai Zasshi

MORIOKA Takashi

(Asian Cultures, Cultural Systems Course)

This paper aims to examine the significance of how the Tohoku region (in particular, Yamagata) is represented in the later issues of the journal Nippon Roman-ha. Opposed to the romantic aesthetics of the ‘sensuous homeland’ led by Yasuda Yōyuro, Kamei Katsuichirō launched a project in this journal conceptualizing Yamagata as a ‘wild homeland’. According to Kamei, this ‘wild homeland’ was alien to the passive enjoyment of traditional beauty, and was a possible catalyst enabling the embodiment of ‘active realism’, the central concept in his philosophy of literature of this period.

Kamei’s project owed much to Yamagata High School, including his personal connections with alumni but, most importantly, the high school periodical, Kōyūkai Zasshi, which gave him the basis for his strategy. Kamei’s project ended in failure when Yasuda criticized the conceptual abstractness of the ‘wild homeland’.

Many of the past studies agree on the inadequacy of Kamei in his adherence to realism. This paper, however, focuses on Kamei’s strategic opposition to Yasuda, and tries to see the Nippon Roman-ha movement as the site of a controversy between the ‘sensuous homeland’ and the ‘wild homeland’.